
大学における子育て支援のあり方についての一考察

齋藤 めぐみ

Study of the Child Care Support in the College/University

Megumi SAITO

キーワード：子育て支援、保育、地域貢献

1 緒 言

1990年の「1.57ショック」を契機に、政府は、出生率の低下と子どもの数が減少傾向にあることを「問題」として認識し、仕事と子育ての両立支援など子供を生み育てやすい環境づくりに向けての対策の検討を始めた。

その始まりとして、1994年12月、今後10年間に取り組むべき基本的方向と重点施策を定めた「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（エンゼルプラン）（文部、厚生、労働、建設の4大臣合意）が策定された。以降、様々なプランや対策、法律の策定など子育て支援策が次々と打ち出されてきた。

2015年には、地域の実情に応じた子ども・子育て支援の充実、子ども・子育て支援法等に基づく「子ども・子育て支援新制度」（以下「新制度」）が本格施行された。新制度では、「保護者が子育てについての第一義的責任を有する」という基本的な認識の下に、幼児期の学校教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進することとしている（内閣府, 2021）。

このように、わが国において、子育て支援は重大な取り組むべき課題である。子育て支援について木脇（2012）は、必要なのは、少子化対策としての子育て支援ではなく、「子育ての社会化」対策をどうするかを考える視点である。つまり、子どもを増やすことが第一の目的ではなく、子育ての枠組みを「母のみ子育て」に偏った構造から「性別や身内のみにとらわれない構造へとパラダイム転換することが求められている」（木脇, 2012）と、述べている。

自治体や民間において、既に「子育て支援」は多く行われている。また、大学において昨今求められている地域連携という点でも実施しているところは多い。

千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所は、「子ども」を様々な視点から、学問的・実践的見地に基づいて研究し、本学の教育及び地域の幼児教育・保育の充実発展に寄与することを目的として2009年に設置された。これまでも地域の絵本の読み聞かせボランティアへの参加、教員の子育て支援関連の出張講座などの活動は行ってきた。しかし、研究所を拠点とした「子育て支援」事業は行っていない。

既に多くの大学では、地域と連携した「子育て支援」事業が行われており、成果を振り返る

研究も多い（最近では、伊東〔2019〕、久保田ら〔2021〕、浜崎ら〔2021〕）。専門家の多い組織がどのような形であれ「子育て支援」に関わるのは意義があると考えられる。

大学として「子育て支援」に関与することを考える時、まずは「子育て支援」を行っている大学の実践例を調査し、そのあり方を検討する必要がある。

以上を鑑み、本研究は大学による「子育て支援」に関連する先行研究を調査し、大学としての「子育て支援」への関与についてのあり方について検討することを目的とする。

なお、本研究で検討する子育て支援は、前述した木脇（2012）の「子育ての社会化」対策をどうするかを視点をもった子育て支援という理解のもとにすすめる。

2 方 法

（1） 大学における子育て支援について

わが国の論文検索サイトであるCiniiにおいて、“子育て支援，大学”をキーワードに検索し、その中で、地域貢献としての大学の子育て支援がテーマである論文、入手可能な論文に絞って、大学が行う子育て支援の目的、内容、特徴、学生の関与、課題等をまとめた。

3 結 果

（1） 大学における子育て支援について

検索の結果、33の論文が抽出された。その中から入手可能、かつ大学が地域に向けた「子育て支援」について書かれた論文に絞ったところ10論文が選出された。その中で、同じ活動を異なる視点で紹介されていたものもが存在したため、ひとつにまとめ、9論文から概要を表1に示した。

それぞれの特徴は以下の通りである。（下線は著者により注目すべき点と考えられた箇所）

1） 夙川学院短期大学 しゅくたん広場（井上ら, 2010；番匠ら, 2011）

保育者養成校での取り組み：「ひろば型」。4名の保育アドバイザーが2名ずつ常駐、「ボランティア登録制度」による学生の参加である。空き教室にシャワー室や子ども用トイレを設置して「子育て支援」施設として利用している。ひろばに加えて月1回の講座も取り入れる。講座は、母親を元気にすることが子どもを健やかに育てていくことに繋がるという考え方のもと、タップダンス、クリスマスリースを作ろう、等母親が元気になるようなプログラムを実施。母親対象の活動としては、他にも予約制でできる箱庭療法。子育てで感じている言葉にしづらいものを箱庭療法により見つめなおす機会となるのではないかということではじめた。結果は報告されていない。

さらに、父親対象のサロンも開催。オープンキャンパスと同時に開催し、高校生と一緒に活動することもある。保育アドバイザーが内容を考え、製作やゲームなどを行う。

2） 中国学園大学① 地域子育てサロンたんぼぼ（上田ら, 2011）

保育者養成校での取り組み：大学は「場」を提供するという立場である。製作やゲームなどを行う他、自主的なイベントとして餅つきなども行う。母親だけを対象とするのではなく、父親参加のサロンも発足し、参加者が主体的に動くことを大切にして計画されている。また、学生が地域のサポーターと協力して働き手となって事業を行っている。参加者は5～6家族程。特に問題などのかかえていない子どもと親が対象。従来、子育て支援では事業主体者の講座やイベントといった取組が非常に多かった。それらも一定の効果は認められるものの子育ての主体となる父親、母親が「お客さん」としての参加を余儀なくされ、日常の子育てとは異なる経験

表1 (1)

1) 夙川学院短期大学 しゅくたん広場 (井上ら, 2010; 番匠ら, 2011)	
基本方針	子育て中の親子の交流の場の提供と交流の促進 子育てに関する相談援助の実施、関係機関へのコーディネート 地域の子育て関連情報の提供 子育ておよび子育て支援に関する講習会の実施 ボランティア学生の指導
目的	母親を元気にする。(このことが、子どもを健やかに育ていくことに繋がるので)
形態	空き教室81m ² にシャワー、子供用トイレを設置 地域子育てセンター事業「ひろば型」
開始	2009年
開催	月曜から金曜の9:30～15:30開室 父親参加は日曜日、 <u>オープンキャンパスと抱き合わせ</u>
運営	4名の保育アドバイザーが2名ずつ常駐、「ボランティア登録制度」による学生参加
対象	0～3歳の子どもと保護者
集客	毎月400名前後
内容	自由参加の広場型十月1回程度の講座＋体験型 図書館の利用、学食の利用を可能とし、 ①母親対象：いつ来ても帰ってもよいひろば型 クリスマスリース作り、楽器に触れる、学生制作の玩具体験、オイルマッサージ、小児科の上手なかかり方、絵本の読み聞かせ等 ②父親対象：日曜日 体験型 子どもと一緒にペットボトルで風鈴作り、オリジナルカバン作り、うちわ作り ③母親対象：予約をしておける箱庭療法
特徴	広場の見学をオープンキャンパスや新入生オリエンに組み込み、ひろばを学生に広く知らせる <u>小児保健実習指導の身体測定の実践を授業の一コマとして組み込む</u>
2) 中国学園大学1 地域子育てサロンたんぼぼ (上田ら, 2011)	
基本方針	子育てを行っている親子に参加の呼びかけを行い「場」として大学施設を提供するものの、その企画・運営の主体は参加者である父親・母親が中心となり、地域サポーターとの協働によって進めていく
目的	地域における <u>主体的子育てサロン</u> へのテイクオフを支援
開始	2009年～
運営	学生有志十教員十地域サポーター <u>学生のボランティアが中心</u>
対象	乳幼児と親
形態	学部の子育て支援室にて月に1～2回開催の母親サロン、2ヶ月に1回開催の父親サロン
集客	子ども学部内の教師と知り合いの母親による縁から発足
特徴	大学は、場の提供を主として、参加者がお客さんにならず、主体が参加者とする
周知	社会福祉協議会の呼びかけ 制作やゲーム、手遊び 5～6家族
その他	医療福祉機構の助成
課題	学生と地域サポーターとの連携体制 活動の方向性、目的意識の持ち方

になる。これらを考慮して、父親、母親が主体となる子育て支援としている。また、この活動自体が地域の子育て支援事業に先駆けてのものであり、地域のサポーターと企画をすすめている。しかし、学生ボランティアと地域サポーターとの連携や方向性の違いが課題となっている。

3) 愛知県立大学看護学部 子育てひろば もりっこやまっこ (大林ら, 2011)

看護師養成学部での取り組み：「ひろば型」。看護師養成校による子育て支援。週1日、午前

表1 (2)

3) 愛知県立大学看護学部 子育てひろば もりっこやまっこ (大林ら, 2011)	
基本方針	①親子が自由に遊んで過ごす子育てひろば ②親子サロン、育児講座 ③学生の教育、研究の場 ④子育て自助グループへの活動場所の提供 ⑤地域自治体の子育て支援事業への参画
目 的	大学と地域との連携による育児支援ネットワークの確立をめざし、連携システムの構築をはかる 事業を利用している親たちとの連携を強め、親たちが自ら子育てしやすい町づくりの推進力となり得るように親たちのエンパワメント促進をはかる
目 標	育児支援を目的とした大学の開放による地域貢献 学生への生きた教育現場の提供
開 始	2007年
開 催	週1日午前・午後各2時間ずつ、8ヶ月間で延べ25日間通算50回
運 営	助産師(教員)、看護師、保育士が常駐する十学生ボランティア10名
対 象	0～4歳前後
集 客	4年間の総計16000名超え 1回あたり親子合わせて124名
内 容	体育館を開放しての子育てひろば 自由ひろば46回・育児講座2回・親子サロン2回 ベビーマッサージ、ベビーヨガ、お口の健康等
集 客	チラシ配布、口コミ
そ の 他	ミニコンサートと手遊び会を自由ひろばの中で開催。学外講師は女性鍼灸師や助産師でエアロビクスインストラクター、音楽療法士などであった。いずれも参加者は1回あたり50人以上
4) 北陸学院大学 赤ちゃんサロン (熊田ら, 2015)	
目 的	親子の休息の場 学習の場ではなく、気軽に集えるサロン 学習成果の発揮の場：発達理解、子育て共感、教材の実演の場 学生の乳児理解の育ち
開 始	2014年
運 営	保育内容「環境」の授業の一環、参加希望者 途中から学生が企画 専門スタッフがいらない
対 象	0～2歳
形 態	子育て支援 打ち解けた雰囲気の中で子育てを語り合う 地域の養育者がいつでも気軽に相談できる場として活用できる子育て支援事業
集 客	11組～18組
周 知	卒業生とその関係者、主催者からの呼びかけで集まった人 行政、自治会に送付、HPに募集記事掲載
方 法	ひろば型
内 容	好きな遊び、ふれあい遊び、おやつ パネルシアター、オペレッタ、制作、エプロンシアター(学生による)
学生の関与	環境設定 コーナー作り

と午後に1回ずつ25週に渡り合計年50回開催している。大学の体育館を利用しての事業で、子どもたちは、広い場所で自由にのびのびと遊べる。大学が地域との連携による育児支援ネットワークの確立をめざして主導している。母親たちのニーズを調査したところ、「広い遊び場所」が約80%、「屋内の遊び場所」「安全な遊び場所」「子どもと外出できるきっかけ」の順で望まれていることがわかった。ニーズに応えた内容としたことで、ひろばに参加した理由や参加して

の評価は「広い遊び場所」「屋内の遊び場所」「安全な遊び場所」「子どもと外出できるきっかけとなった」という評価が高かった。教員でもある助産師、および看護師、保育士が常駐し、学生ボランティアが10名ほど担当する。自由に遊べるひろば型の支援事業であるが、看護に特化した講座、例えばお口の健康、ベビーマッサージなどを取り入れている。また、ミニコンサートと手遊び会の開催などを行い50名くらいの参加者がる。学外講師は女性鍼灸師や助産師でエアロビクスインストラクター、音楽療法士などである。

4) 北陸学院大学 赤ちゃんサロン (熊田ら, 2015)

保育者養成の大学での取り組み：親にとっては、学習の場ではなく、親子の休息の場として気軽に集えるサロンとしている。学生にとっては、乳児の発達理解、子育て共感、教材の実演の場としての目的がある。保育内容「環境」の授業の一環として使われ、参加者は卒業生が多い。また、提供する講座の内容は途中から学生が企画する。基本的には自由な遊びの場を提供するというスタイルのため、学生がそのための環境を整えたり、自分で作成したパネルシアター、エプロンシアターなどを実演する機会を作っている。特に専門スタッフを常駐させていない。授業の一環ということもあり、参加者に対しては、教員が卒業生に呼びかけて始まった。

5) 中国学園大学② 子どもサロン (楨尾ら, 2014)

保育者養成校での取り組み：療育センターに通う障害をもつ子どもとその保護者と対象とした子育て支援；小学校低学年まで受け入れる。月1回土曜日に開催する。専門スタッフの他、担当教員のゼミ生を中心とした学生スタッフで構成。学生スタッフは、療育センターに通い、そこでの学びをサロンで活かせるように活動している。地域ボランティアや親が専門的知識を必要としている。大学教員は、最新の研究内容をわかりやすい言葉で一般の人々の暮らしに役立つよう伝える、専門家への橋渡しの役割、支援を必要とする家族の声を地域に伝える、地域の人が障害についての理解をもつようにする方法を考える、等の役割をもつと考えている。参加する親にとっては、一時的であってもホッとする場になり得る。サロンで行うことは、学生と子どもとで考え、手遊び、絵本の読み聞かせ、製作などを行う。開設当初は、なかなか参加者が集まらなかったが、地域への情報提供により、逆に参加者が増えたが調整し、4年目には休日の居場所となるくらいになる。適正人数として1回につき、10組までの親子としている。

6) 滋賀短期大学 SHIGATAN乳幼児ふれあい・保育体験事業 (前川ら, 2019)

保育者養成校での取り組み：母親に対する講習会の実施を行う。講習会中、講習を受けた学生ボランティアが、子どもたちを見守っている。母親の学びは、心理教育的なもの。6回の講座であり、参加者は、2名～8名。

7) 滋賀文教短期大学 ぶんぶんひろば (伊藤, 2019)

保育者養成校での取り組み：学生企画のもと、地域の未就園児と保護者を対象に、親子が楽しめる様々な子育て支援の催しを行う。アクティブラーニングを取り入れ、地域課題である「子育て世代の支援（人口減少対策）」の解決にむけて事業を実施。2018年度は年間7回実施し、ふれあい遊び、身体を動かして遊ぼう、触って遊ぼう、水遊びをしよう、等体験型の支援。

学生と教員の保育力、専門性の向上を図り、大学が地域社会に貢献する場と位置づけ、園の子育て支援や地域の子育て支援に貢献できる人材の育成を目指す教育の一環でもある。1回の参加者は回により異なり、年間で260組弱の参加者があった。

8) 大阪国際大学短期大学部 わくわくランド (久保田ら, 2021)

保育者養成校での取り組み：地域の子育て支援に寄与、学生が子育て支援の専門性を養うことを目的に実施。製作、リトミック、ゲームなどの体験型と劇発表を観る、という鑑賞型が混

表 1 (3)

5) 中国学園大学2 子どもサロン (槇尾ら, 2014)	
目 的	障害児対象 土曜日2時間 子どもが地域の他の子どもや学生たちと出会い楽しい遊びを経験すること 親が地域の他の親と出会い、ほっと一息できる場を提供すること 専門家に相談できる場所を提供すること
開 始	2011～
運 営	サービス管理責任者、教師、学生ボランティア
対 象	療育センターに通う幼児から小学校低学年程度
形 態	子どもサロン+子育て相談会
集 客	月1回 土曜日から日曜日 1日5組くらいまで
特 徴	ゼミ学生を中心に参加。学生は5名ずつ療育センターに通う。また学生が計画を立てる
周 知	療育センターにちらし配布
内 容	手遊び、歌、絵本の読み聞かせ、工作+子育て相談会
経 過	1年目：読み聞かせ、歌、手遊び、工作 学生が子どもたちと遊び、母親は休息できた。子育て相談会実施 教員専門家 2年目：参加者が少ない⇒地域への情報提供が不十分⇒増えすぎた 学生と子どもたちとで内容を決める 3年目：適切な人数 4年目：休日の居場所になった
大学の役割	専門家への橋渡しの役割 講義や演習で学び、実践する場所 支援を必要とする家族の声を地域に伝える 地域ボランティアや親が専門的知識を必要としている。大学教師が、最新の研究内容をわかりやすい言葉で一般の人々の暮らしに役立つよう伝える場 学生の行動を専門的な立場から確認する
課 題	地域の人を巻き込む方法⇒障害のある子どもがそとで遊ぶのが難しいこともあり地域の人 の理解と支援が必要
6) 滋賀短期大学 SHIGATAN乳幼児ふれあい・保育体験事業 (前川ら, 2019)	
目 的	地域における乳幼児保育、本学の教育の向上に資すること
開 始	2018年
運 営	
対 象	対象 保育施設に通っていない乳児と親
形 態	心理関連講座×8回
開 催	金曜日、土曜日
集 客	6～10名
周 知	
内 容	安心感の輪 子育てプログラム 心理教育プログラム 子どもは学生がみている

在する活動である。授業の中で準備をしたり卒業発表会に地域の参加者を招待するなど、大学の学びとも連携している。実際の活動の内容は、教員の専門性を生かした回と学生企画の回があり、年間5～9回実施。学生主催の回の準備は、教職実践演習にて行うが、実際に子育て事業活動に参加するのは、ボランティアの学生のみ。併設園の作品展と同時開催したり、卒業発表会を地域に開放して行ったりして、600人の参加があった回もあった。3年間実施していく中で、2年目は乳児に特化した企画を加えたり、こども園と連携してクリスマス会を行ったりした（事業開始4年目にはコロナ禍となり、報告は3年間分のみ）。

表1 (4)

7) 滋賀文教短期大学 ぶんぶんひろば (伊藤, 2019)	
目的	学生企画のもと、親子が楽しめる様々な子育て支援の催しを行う 地域課題である「子育て世代の支援（人口減少対策）」の解決にむけて実施 学生と教員の保育力、専門性の向上を図り、大学が地域社会に貢献する場と位置づけ、園の子育て支援や地域の子育て支援に貢献できる人材の育成を目指す
開始	2018年
運営	学生が子育て支援講座を受講したのちアクティブラーニングの一環として行う
対象	地域の未就園児と保護者
形態	子育て支援活動 体験型
集客	集客 年間合計259名/7回
周知	友人、以前に参加、ちらし
方法	平日と土曜日：全員参加でないことから、授業外に設定したと考えられる
内容	学生の企画で行う（明記がないが、アンケート結果から） ふれあい遊び、身体を動かして遊ぼう、さわって遊ぼう、水遊びをしよう、ミニ運動会、 さまざまなコーナーで遊ぼう楽しみ会 意義 経験を重ねることが学生の自信につながる
意義	保護者と子どもとの関わりを直接見たりすることは、卒業してすぐに保育現場で働く学生にとって意味のある活動である 学生の実践的な学びの場、地域貢献としての子育て支援、教員の研究および授業へのフィードバック
参加理由	アンケート結果を <u>家庭支援の授業</u> で公表し、大学における子育て支援の意義について検討する 「子どもの遊び場を求めて」80.8%、「以前参加して良かったから」28.8%、「参加したい活動があったから」22.6%、「知人、友人に誘われて」21.2%
学生の反応	ぶんぶんひろばで学修したことが教育実習で役に立った。子どもを直接見るきっかけになった。普段の学びを実践に生かせる 学生よし、参加者（子どもと保護者）よし、教員よし
8) 大阪国際大学短期大学部 わくわくランド (久保田ら, 2021)	
目的	地域の子育て支援に寄与、学生が子育て支援の専門性を養うこと
開始	2017年～
運営	学生＋教員＋地域とのコラボ
対象	乳幼児
集客	年間1000名超え
内容	講座、体験 1年目：教員の専門性を生かした回と学生企画の回、学生は教職実践演習にて準備を行う 学生主催の回は、今日即実践演習で準備し併設園と共催、卒業発表会を地域に開放した回は600人の参加があった 2年目：乳児対象とした企画を追加 クリスマス会は、こども園と連携して市役所で開催 3年目：教員の専門性を融合した内容が加わる（美術＋体育）
効果測定	終了後、学生に対して社会的スキル、子育て支援力、保育観を測定

9) 神戸女子大学健康福祉学部 子育てコラボサロンどーなつ (下司ら, 2021)

看護、福祉系の学部での取り組み：地域の養育者がいつでも気軽に相談できる場として活用できる子育て支援事業を目指す。内容としては、講義90分＋質疑応答。教員が講義と交流会、学生は保育ボランティア（看護、福祉）2人～6名 講義90分＋質疑応答 土曜日の2時間開催 参加者は2名～8名で毎回異なる。

表 1 (5)

9) 神戸女子大学健康福祉学部 子育てコラボサロンどーなつ (下司ら, 2021)		
目的	地域の養育者がいつでも気軽に相談できる場として活用できる子育て支援事業	
開始	開始 2018年	
運営	教員が講義と交流会、学生が保育ボランティア 学生(看護、福祉)はボランティアでの参加 2人～6名	
対象	1回目のみ保育専門家、保護者と乳幼児	
形態	講義90分+質疑応答	
開催	土曜日の午後2時間×6回	
集客	2～8名(親子)	
周知	市内の保育施設にパンフレットを配布 行政、自治会に送付、HPに募集記事掲載	
内容	内容 気になる発達とサポート、家庭内で起こりやすい乳幼児の事故、感染予防、ことばの発達等の講義	

4 考 察

本研究は、大学による「子育て支援」に関連する先行研究を調査し、大学としての「子育て支援」への関与についてのあり方について検討することを目的とした。

まず、先行研究から、具体的な支援の方法について考察する。

大学における「子育て支援」の形態として、積極的な講習会等を企画するもの、ひろばを提供するもの、単に「場」の提供に留まるものがあることがわかった。大学で行う意義としては、地域貢献があるが、地域からの利用者だけではなく、学生の学習の場ともなるべきである、ということである。すなわち、学生の参画のない支援事業はない。昨今、保育実習などで、乳児にどのように対応したらよいかわからず戸惑う、という学生ををよく耳にする。また、子どもの発達を実際に目で見て確かめる場にもなり得る。さらに、実習ではなかなかできない保護者との対応を実践する場にもなる。乳幼児が保護者と参加し、学生との接点がある支援事業であれば、学習上意味のあるものとなり得る。大学によっては、支援事業の活動内容について、学生が主となって企画するというものもある。いずれにしても、学生が参画することによる学生の得るものは大きいと考えられる。

学生の参加については、ボランティアでの参加が多いが、授業の一環として子育て支援事業と関わることを実践しているところもあった。また、準備は教職実践演習、関連するゼミ生等、アクティブラーニングを特に取り入れている授業での関りは行いやすいと考えられる。さらに、久保田(2021)のように、卒業研究会や作品展と連携するなどは、地域の人たちとの連携方法や広報の方法を検討するだけで実行可能性が高いであろうし、活動の活性化にもつながると思われる。

「子育て支援事業」の設定場所については、特別な場所を創設しなくても体育館を開放する、空き教室を使用する、というように現在ある資源に少し何かを加える工夫次第で利用可能であるということもわかった。大林ら(2011)、の体育館の開放などは、母親のニーズもあることながら、昨今の安全な戸外の広い遊び場を失っている子どもたちにとって、大きな意味がある。幸いにも大学は、休みの期間が長いこともあり、これもすぐに実行できそうである。

「子育て支援事業」を行う場合の運営については、常駐スタッフがいるところがあれば、教員が主となって運営されているところもある。また、地域ボランティアと連携している取り組

みもある。常に開いている「ひろば」的な活動であると常駐スタッフが必要となる。また、常駐スタッフがいれば、より充実した内容を提供できる。それが可能でない場合は、教職員が先導することになり、どうしても教職員の負担は免れない。ただし、ゼミの成果発表負担のないことで学生と一緒にできる可能性はある。

活動内容としては、ひろば型に講座などを入れる形式において多くの参加者が集っていると思われる。特に、母親が主体となって企画する母親が楽しむ講座には参加者が多い。下司(2021)は、保護者が専門家の話を聞いて新しい知識を学ぶことにとどまっては支援の報告が一方的なものになってしまう。保護者自身と子どもにあった子育てスタイルを見つけ出し、それを共有していくことが大切である。子育て支援のコミュニティを形成していくためには保護者が学びあい、保護者自身が養育力を高めていけるような関わりが必要だといえる、と述べている。可能な限り、指導者との双方向、参加者との相互方向、また、体験型で学べる企画が好ましい。

民間が行う新しい子育てサロンのひとつとして、木脇(2012)は、カフェ型のサロンを紹介している。子育て中の母親は、大人と話したい、喫茶店でコーヒーを飲みたい、という声をよくきく。自治体が行う子育て支援講座でも、託児があると喜ばれるとのこと。自分だけのゆったりとした時間をもつ時間と空間の提供が望まれていることがわかる。

次に、大学の「子育て支援事業」に関するあり方について考察する。

大学が行う「子育て支援事業」の意味は槇尾ら(2014)が述べているように、サロンで集まった参加者だけを対象とした支援でなく、保護者と専門機関との橋渡しになる、住民に理解を求める働きをするなども大学の役割であろう。槇尾(2014)については、障害児を対象としたサロンであるが、これこそ大学の資源を利用した子育て支援である。木脇(2015)も少数者対応子育てサロンを紹介しているが、障害児の他にも多胎児、ひとり親、親が障害をもっている等への支援も必要であると同時に、自治体や民間で実施しづらい支援まだ行われていないがニーズの高い支援を考えることも大学の役割であると考ええる。

父親の育児参加に対しての支援もまだあまり行われていず、今後検討することが必要であると考えられる。番匠ら(2011)と上田ら(2011)は、父親参加の支援も行っていることを明記している、その他は、母親対象であるものが多い。父親対象ということで、両親がそろっている父親への支援も望まれるが、父子家庭への支援も必要であろう。下田(2022)によれば、父子家庭では、家事の困難が一番の支援ニーズであるという。子育て支援として、家事の方法を学ぶ、また、緊急時にヘルパーを派遣できるしくみづくりなども考えられる。これは、木脇(2012)の提唱する「子育ての社会化」にあたる。

「子育て支援」は、親と支援者との間に大人同士の関係を築くことで、孤立を予防し、「子育て」(親の養育)と「子育て」(子どもの発達)を支援することによって、家族の結びつきを支えることにもなる(加藤, 2015)。母親だけに任せない、母親に加重がかからない子育ての実現に向けて、大学として行えそうなことを大学が負担でないことから少しずつ実行していくことが望まれる。

[付記] 本研究は、令和4年度学長裁量経費(教育改革プロジェクト)の一つの取り組みとして実施されました。

■引用文献

- ・伊藤孝子(2019)保育士養成課程を有する大学における子育て支援活動～「ぶんぶんひろば」の教育的意義について～ 滋賀文教短期大学紀要210

- ・井上千晶、番匠明美、三木麻子（2011）大学における地域子育て支援—しゅくたん広場での実践—夙川学院短期大学教育実践研究紀要（3），17-24
- ・加藤邦子（2015）子育て支援に関する政策動向 家族関係学34（0），37-45
- ・木脇奈智子（2012）多様化する「子育て支援」の現状と課題：新たなニーズとそれに対応する事例から 藤女子大学QOL研究所紀要／藤女子大学QOL研究所編7（1），37-43
- ・久保田健一郎、玉井久実代、野口知英代（2021）保育者の専門性としての子育て支援に関する研究—大学における子育て支援活動「わくわくランド」に関連して—
- ・国際研究論叢：大阪国際大学紀要34（3），69-87
- ・熊田凡子、山森泉（2015）大学における子育て支援の取り組み（1）—北陸学院大学における「赤ちゃん・サロン」の試行と環境づくり 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要8，33-43
- ・下司実奈、曾田里美、稲垣由香里、菅野由美子、丸山有希、内正子（2021）大学を拠点とする多職種による子育て支援事業“子育てコラボサロンドーナツ”の実践 神戸女子大学健康福祉学部紀要13，1-12
- ・下田優子、清水彩、黒瀧安紀子、上野まき子、石井美由紀（2022）子育て期のひとり親が抱えるワーク・ライフ・バランスの課題と支援に関する文献検討 京都橘大学研究紀要48，191-206
- ・内閣府（2022）令和4年版 少子化社会対策白書 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2022/r04pdfhonpen/r04honpen.html> 2022年12月4日閲覧
- ・浜崎由紀、松井典子（2021）短期大学における子育て支援の取り組み（2）—SHIGATAN 乳幼児ふれあい・保育体験事業を通して— 滋賀短期大学研究紀要（46），203-211
- ・番匠明美、井上千晶（2012）大学における地域子育て支援（2）しゅくたん広場での日曜講座・箱庭療法体験講座に関する実践報告 夙川学院短期大学教育実践研究紀要（4），17-21
- ・前川頼子、浜崎由紀、松井典子、松井瑞季（2019）短期大学における子育て支援の取り組み—SHIGATAN 乳幼児ふれあい・保育体験事業を通して— 滋賀短期大学研究紀要（44），225-237
- ・槇尾真佐枝、梅野潤子、山本利実子、福知栄子（2014）子どもの育ちを地域で支えるワンストップ・サービスの開発—大学における「地域子どもサロンたんぽぽ」の事例から— 中国学園紀要14，139-146
- ・山森泉、熊田凡子（2016）大学における子育て支援の取り組み（2）—「赤ちゃん・サロン」2年目の報告 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要9，71-82